

AP Annual Conference 2013 参加報告

ベネッセ教育総合研究所 高等教育研究室

野澤 雄樹・加藤 健太郎

Advanced placement (AP) は米国 College Board が運営している高校生向けの教育プログラムです。大学教養課程（1～2 年次）レベルの授業および試験（AP examination）を高校生に提供し、授業の成績や試験結果が大学入学時の可否の判定材料や入学後の単位として認定されるというものです。提供されている科目は 34 にのぼり、プログラムに参加している高校は世界で約 18000 校、AP を入学の判定材料や単位認定の参考にしている大学は世界で約 3600 校、米国の公立高校生の 30%以上が AP 試験を受験し（以上 2012 年度の実績）、その数は増加傾向にあります。日本における高大接続の問題や今後の大学入試のあり方を考える上でも、大いに参考になるプログラムとして注目されています。

毎年開催される AP 年次会議（AP Annual Conference）には、AP の授業や AP 試験の採点を担当する高校・大学の教員、プログラムの運営を担う教育委員会の職員、AP の研究者らが全米や海外から多数集まり、研究・活動報告やワークショップが行われます。今年度の会議は 2013 年 7 月 18 日～21 日に米国ラスベガスで開催されました。

開会総会では、College Board の副所長である Trevor Packer 氏より、2013 年 5 月に実施された AP 試験の結果報告がありました。それによると、2013 年は合計 220 万人が AP プログラムに参加し、AP 試験の合格者は延べ 230 万人でした。全体の平均点の経年比較や、例年に比べて成績が上がった／下がった科目（英語）、出題範囲や内容に変更があった科目（生物）について、より詳細な分析結果の報告もありました。また、総会の後半では新規に設置される科目「Computer Science Principles」について、その必要性や現状（大学での専攻者数と労働市場での需要とのギャップ、中等教育における認知度の低さなど）の報告や、様々な NPO (<http://code.org> など) や国立科学財団 (National Science Foundation ; NSF) を巻き込んだプロモーションの紹介がありました。

「AP の今後の展開」と題されたセッションでは、AP プログラムに関連して現在進行中／導入検討中の様々なプロジェクトについて、同じく Packer 氏より報告がありました。セッションは会場との対話形式で進められましたが、AP を担当する高校の先生たちは、やはり AP 試験でいかによい点を取らせるかということに高い関心を持っているようです。これに関連して、ウェブ上の学習ツールとして AP Insight というシステムが提供されていますが、このシステムのさらなる充実や無償化に強い期待が寄せられました。また、科目別の AP と組み合わせて受講できるプロジェクトベースでより学際色の強い AP Cambridge Capstone プログラムや、AP をさらに下の学年に適用するための Pre-AP に対しても、関心・期待の高さがうかがえました。その他には、AP 試験の実施上の問題（受験者情報の登録手続きの簡略化やウェブ上でのテスト実施など）とその改善策についても議論が交わされました。

ワークショップでは、高校で AP の授業を受け持つ教師を主なターゲットとして、科目別に指導法や試験の内容についてのレクチャーがありました。特に AP 試験には論述式の問題が含まれるため、採点基準や実際の採点手順について、実際の答案例を見ながら詳細な解説がありました。現場の先生たちにとっては生徒が試験で好成績を収めることが重要な関心事ではありますが、ワークショップの冒頭で、一部

の高学力層の後押しでも低学力層の底上げでもなく「すべての生徒に公平に機会を与え」「全体のレベルアップを図る」という AP の基本理念がしっかりと説明されたのが印象的でした。また、科目別以外にも、高校や学区への AP プログラムの導入や AP 試験の実施・運営上のノウハウに関するワークショップも多数開講されていました。

来年の年次会議は、2014 年 7 月 9 日～13 日に米国フィラデルフィアで開催される予定です (<http://apac.collegeboard.org/>)。AP に関する総合的な情報については、College Board のホームページ AP Central (<http://apcentral.collegeboard.com/>) をご覧ください。